

## 特集 政治分析・日本政治研究における アプローチのフロンティア

研究の戦略	高根正昭『創造の方法学』を読みながら	村松岐夫	15
日本政治と政治学の転換点としての一九七五年	—「レヴァイアサンたち」の三〇年	大嶽秀夫	20
アジアの political culture の比較	猪口 孝		36
政治学とニューヨーク・サイエンス	蒲島郁夫		41
政治学と手稿	井手弘子		
<hr/>			
歴史			
国際秩序論と近代日本研究	酒井哲哉		
政治史研究と現代政治分析	拙著『財界の政治経済史』をめぐって	松浦正孝	
外交史と現代政治分析	細谷雄一		
	66	57	51
<hr/>			
比較			
地域研究と現代政治分析の間	大西 裕		
現代アメリカ政治研究は何を目指すべきなのか	一つの試論	待鳥聰史	
海外における現代日本政治研究	堀内勇作		
「比較選挙研究」のすすめ	西澤由隆		
	94	87	80
<hr/>			
アクト			
議員行動における因果的推論をめぐって	建林正彦		
官僚・自治体の経験的分析	稻継裕明		
地方政府・政策分析	伊藤修一郎		
中央地方関係の理論的分析へのいざない	北村 亘		
市民社会の集団・組織分析	鹿毛利枝子		
選挙・政治参加			
選挙制度の合理的選択論と実証分析	鈴木基史		
政治参加研究における計量的アプローチとフィールドワーク	山田真裕		
選挙と政党に関するデータの作成について	品田 裕		
	152	145	139
	130	122	115
	108	101	94
	73		

選挙過程の実態把握を目的とする研究について 森 裕城

#### 方法論

ゲーム理論に関心のあるあなたに一使い手になるための三つのステップ 曾我謙悟

日本における政治学方法論へ向けて 福元健太郎

政治学が学際研究から得るもの 谷口尚子

事例分析という方法 内山 融

日本政治研究におけるアプローチのアプローチ 谷口将紀

#### 方法的研究例

法化理論と日本の通商外交－理論と実際の接点を求めて 飯田敬輔

議会研究－権力の集中と分散 増山幹高

計量政治学における因果的推論 今井耕介

「対米協調」／「対米自主」外交論再考 保城広至  
[研究ノート]

不均一な選挙制度における空間競争モデル 上神貴佳

清水大昌  
[書評] 「二〇〇一年体制」は「成立・定着」したか？ 個性記述と一般化 伊藤光利  
竹中治堅著『首相支配－日本政治の変貌』中公新書、二〇〇六年  
273

政治学の景観を一変させる可能性をもつ「相互参照」 北山俊哉  
伊藤修一郎著『自治体発の政策革新－景観条例から景観法へ』木鐸社、二〇〇六年  
277

制度改革と政治的リクルートメント 丹羽 功  
浅野正彦著『市民社会における制度改革 選挙制度と候補者リクルート』慶大出版会、二〇〇六年  
281

273

255

234

執筆者紹介  
書評委員会からのお知らせ  
第十三回三宅賞について

65 86 289

編集後記  
投稿規定

デザイン 山崎豊／寺田有恒

290 291

160

166

173

180

186

190

196

205

212

224

234

いる事柄であろう。だが実際に、それらが近代日本で作用した文脈は、上述の例からも窺えるように相当程度込み入ったものである。勉強すればするほど新たな謎が発生し、犯人をつかまえるために繩を急いでこしらえるような日々が、近代日本研究の入り口に立つ者には待っている。このような接配で、筆者は「一夜漬け」の日々を約三〇年間過ごしたが、ますます謎は深まるばかりだ。しかし、これも一つの幸せの形であろう。

〔付記〕なお、本稿で紹介した拙論の多くは、近刊予定の論文集『近代日本の国際秩序論（仮題）』（岩波書店）に採録される予定である。

特集 政治分析・日本政治研究におけるアプローチのフロンティア 歴史

## 政治史研究と現代政治分析

——拙著『財界の政治経済史』（東京大学出版会、  
二〇〇二）をめぐって——

松浦 正孝

### はじめに

現実政治を分析するためには、現在を制約する制度や経路、システム等をきめ細かく理解する必要があり、歴史を無視することはできない。近年の政治学理論では、分類学的にこうした立場を歴史的制度論や歴史経路依存論と呼ぶことがある。社会科学は、モデル・仮説を立ててこれを実証していく学問であるとされる。しかし、囚人のジレンマに限らず、モデルには必ずそのモデルを立てた際の環境がある。多くの人に理解可能なモデルを作るためには単純化が必要であり、極めて限定された初期条件を選び取る必要がある。理論的・合理的な政治学アプローチが掬い取ることのできな

い生身の人間行動を、叙述的アプローチにより豊饒で複雑で多面的な可能性として描き出す當みによって、より深い人間理解・政治理解への手がかりを提供すること、そして、単純化されたモデルでは説明できない事象に内在的に迫ることで、逆に新たなパターンやシステム、論理などの析出（但しそれは必ずしも普遍的なものではない）に到達することこそ、政治史分析の醍醐味ではないだろうか。ナショナリズムや共同性、イデオロギーといった時に非合理的に機能する現象を、思想史や言説分析の立場からではなく政治経済史的に説明することもその中には含まれる。実際に行動した歴史上の人物を追跡することで、複雑な政治経済に関わる現象や制度を理解する際の構造把握をする手がかりを提供し、日常の身近な行動や経験、心理に照らして思わず肯いてしまうような疑似体験の積み重ねとして「大政治」の一幕一幕を説明する経験を重ねることができよう。その際、現在の政治学の主流からは大きく隔たってしまった文化人類学や民俗学、社会学等の膨大な蓄積に学ぶことも必要である。

こうした立場から「財界」という制度の生成を政治学的に分析した『財界の政治経済史』は、経済史・経営史学者には予想外に読まれたものの、政治学者にはごく少数の例外を除いてほとんど顧みられなかつた<sup>③</sup>。そこで、この本の政治学的含意を改めて紹介したい。

### 着想——モデルの修正

本書を貫く財界というモチーフとの出会いは、博士論文で日中戦争期の経済政策を池田成彬を中心に分析した際に、その前史として検討した、高橋是清を中心とする政治路線が一時挫折するきっかけとなつた帝人事件である。一大スキヤンダルとして斎藤内閣を転覆させながら、三年後に下された東京地裁判決は、事件が犯罪事実 자체が存在しない全くの「空中楼閣」であるとする判断に基づき「全員無罪」であった。

帝人事件の意味を探る中で、そこで攻撃された番町会という経済界の黒幕集團に関心を持つた。当時は政党内閣が崩壊した直後で、帝人事件も財閥を中心とする不明朗な財界権力と政界・官界との癒着と見なされた。政党内閣崩壊の原因となつた五一事件は、その少し前に起きた血盟團事件（一九三一年二月井上準之助前藏相、三月三井合名理事長团琢磨が井上日召ら血盟團のメンバーに暗殺された事件）と関わりが深く、二つの事件の首謀者は共に、政党と財閥とが結託して利権を漁り、不況に苦しむ農村を疲弊させ、政治を腐敗させているという動機づけを持っていた。憲政会・民政党内閣の加藤高明・幣原喜重郎と三菱との閨閣関係や金解禁の際の財閥によるドル買いの事実などもあって、マルクス主義史観における「資本主義による帝国主義戦争」「ファシズム」モデルや、その裏返しとしての「革新派」モデルにおいても、こうしたイメージは受け継がれ、財界をめぐる從来の権力論も「財閥即財界」が戦前の政治に大きな影響力を与えたとするものが多かつた。帝人事件もまた、こうした文脈で「検察ファッショ」と結びつけられてきた。

しかしながら、日本經濟連盟会など当時の財界団体の中心人物は、こうした見方を否定している。何よりも、「時事新報」によつて帝人事件を糾弾する急先鋒となつた武藤山治が、番町会の中心とされた郷誠之助、井上準之助、和田豊治ら財界の指導者を激しく攻撃する一方で、財閥の中心人物であった三井の团琢磨が殺された際には、悪いのは三井・三菱のよくな巨大財閥ではなく「財閥の一段下や世間的に名の知れない方面にある」と述べ、団のような人格者が横死したのは、政治家と結託して好ましからぬ行為をする実業界の一部と混同された為であると、それは政治権力としての財界とは別である。世に知られた財閥とは別に、経済活動を行う経済界におけるインフォーマルな政治権力としての財界といふ枠組を新たに立てた研究は乏しい。確かに、財閥には巨大資本に基づく構造的権力がある。しかし、泉と構造とを解明した上で、現代における財界の実像に少しでも迫りたい。当時の右翼や体制変革指向の「革新派」が旧体制の象徴としてイメージ操作した結果成立した経済界における政治権力に関する認識と、経済活動や當時動搖していた経済システムを運営する活動を担つていた財界という実態との区別へと、筆者の関心は向かった。

### データによる実証

現代政治分析が如何にインタビュー オーラル・ヒストリーを行い、政治学の概念やモデルを駆使しても、資料的制約やバイアス、厳密な実証方法の欠如といった限界のため間接的証明に止まり、印象論を完全に拭い去ることは難しい。本書が財閥モデルに代わり、隠された権力としての財界という新たな歴史モデルを、曲がりなりにも実証分析に基づいて提示することはできたのは、歴史家が受けるデータ面での億傍による。まず、財界の中心であつた和田豊治や池田成彬や財界と関わりの深かつた田健治郎<sup>⑤</sup>らの日記が容易に利用できるようになつたことが大きい。一次史料である日記と多くの財界人の伝記・回想を突き合わせ史料操作を行うことで、財界中枢で、八日会という基本上に約一〇名の後述する財界世話業や各業界代表から成る固定的・閉鎖的メンバーが、一九一七年から四四年までの三十年近い間毎月一回会合を行い、政府・政界の主要人物を招いて重要な政治経済問題に関する意見・情報交換をしていたことが明らかになつた。財界の権力核は実在したのであり、公式の審議会議事録等を見ているだけではそれはわからない。

財界人の多くが、何らかの形で回顧録や伝記を残していたことも大きい。これらの資料にはバイアスや記憶の誤り、事後の意識的・無意識的な記憶操作が含まれるため、史料相互を突き合わせた史料批判や、当時の新聞・雑誌記事による確認・補正作業が必要である。

### 文化人類学モデル適用による権力構造の解明

新聞記事を中心とする史料を読み進めるうち、「財界世話業（世話人・世話役）」という聞き慣れない言葉が多用され、それ

が財界の構造を理解するために不可欠であることに気づいた。そんな中、文化人類学者がだみのるによる前近代以来の日本におけるムラ（部落）の「世話役」に関する説明を読む機会があり、「世話」という概念が日本の政治社会を理解する上で極めて重要であることを知った。ムラで「世話役」になるのは、そこで人格者として認められているおつとりしたタイプでしかも他人から乗せられないだけの賢さを備え、住人が頼みに来る難多で割に合わない仕事（雑用）を、日常的に嫌な顔もせずにこなし世話を焼くことができる者である。互酬・互助・平等・公平・均衡や伝統・慣習が重んじられ和合が大事にされるムラには調整型の名望家が必要で、これが世話役である。世話役が日常的に行う世話は、世話役に対する義務や信頼感を生み、それが世話役の持つ指導力や権力の源泉となる。<sup>25)</sup> きだの分析は、文化人類学者としての意味解釈的なしかし経験に基づくモデルであり、宮本常一や赤坂啓介、江馬修ら文化人類学・民俗学の先學が残した業績に裏付けられてきた。身近な社会現象をよく説明するモデルであると思つた筆者は、「世話」を、クライエンテリズムにおける恩顧と同様、権力と交換可能な経済社会における政治分析の概念と捉え、財界世話業による世話を歴史的に追跡していくつた。

そこで財界世話業の嚆矢であり原型として注目されたのが、渋沢栄一である。明治初期、海外経験の後に大蔵官僚となつた渋沢は、財政金融制度を始めとする日本の経済システムを創出した。井上馨に従つて下野した後は、かねてより必要を感じて

な救済融資を行つた日銀総裁井上準之助、東京株式取引所（現在の東京証券取引所）理事長郷誠之助らは、いずれも、官僚・政治家とのネットワークを持ち、経済界内における資本・人材・情報等のネットワークを持つ、世話業として恐慌克復を含む経済社会における問題解決を行い、それまで「島」であつた各業界を日本経済連盟会や八日会という形で統合・制度化していくつた。財界世話業は、各業界を代表すると共に、彼らを支える実働部隊としての下位グループを擁し企業再建や紛争解決に当たる情報不ツトワーケのハブであつた。彼らは企業合併や救済、企業間紛争・労使紛争の仲介、融資の斡旋や経済界の制度維持・修正等に、資金・人材・政治的経済的人脈・情報を資源として「世話」を行うことで政治的影響力を高め、それによりますます情報を集積させ人々を集めた。昭和恐慌を含む幾たびの恐慌も、財界ネットワークの連携によって克服されたのである。第二次山本権兵衛内閣・浜口内閣・第一次若槻内閣における井上の藏相就任や田中義一内閣における井上外相構想は、この時期政治が財界世話業としての井上を軸に動いていたことを示している。和田・井上が世を去つた一九三〇年代になると、銀行資本家である三井合名常務理事池田成彬と日本興業銀行総裁結城豊太郎が郷と共に第三世代の財界世話業として、財界の中核を担つた。財界の組織化は、団琢磨遭難の後を受けて郷が三二年三月日本経済連盟会会长に就任し、日本商工会議所会頭、全国産業団体連合会会长と主要経済団体トップを兼任し、銀行資本家・工業資本家・中小商工業者の「島」を統合したことで完成した。

いた民間の会社・銀行の設立に参加し、その出資・経営に関わった。すでに経済権力として成長していたブルジョワジーが政治権力をも集中するようになつていつた欧州社会とは異なり、「世話」という概念が日本では会社を始めとする西洋諸国のような新しい概念や装置、制度を日本という異なる文脈に移植していく必要がある。このため大衆投資家や機関投資家の存在しない当時、渋沢は株式会社を設立するためにまず身銭を切り、奉加帳方式で富豪らに投資を促し、その上で中小の株主を勧誘した。近代日本に必要なインフラである鉄道・運輸・紡績・肥料・製紙・石炭・ガス・煉瓦といったものを扱う会社や、銀行・保険会社、さらには後の商工會議所・銀行協会・株式取引所・手形交換所・興信所・一橋大学等を設立して、富國強兵のための基礎固めを行つた。同時に、恐慌に際しての経済界救済・紛争仲裁・合併斡旋などを行つて、経済システムが円滑に動いていくよう努力すると共に、経済発展のため植民地経営や民間外交にも尽力した。渋沢が関係した会社は五〇〇余に上るが、彼が関係した公共・社会事業関係の役職は約六〇〇あつたと言われ、彼の世話が経済社会に止まらずそれに隣接するすべての分野に及んでいたことが窺われる。彼は多くの政治家・政府関係者や財閥関係者と密接な関係を持つていたが、ブローカーではなく全体利益の調整者として声望を博し、自らは財閥を作らなかつた。彼を慕う龍門社という修養団体もあつた。

渋沢が、資本主義が確立する第一次世界大戦後に第二世代の財界世話業として育て、交代した富士紡社長和田豊治、大規模町会」攻撃が始まり、帝人事件が起つたのである。

しかしその後も、財界は岡田内閣の内閣審議会に池田と各務鎌吉東京海上会長を送り込み、林内閣には結城を藏相兼拓務相として入閣させた。第一次近衛内閣では池田が藏相兼商工相として戦時経済を切り盛りし、その後も第二次・第三次近衛内閣の村田省藏通相兼鉄相（大阪商船社長）、第三次近衛内閣藏相の小倉正恒住友本店總理事、米内内閣の藤原銀次郎商工相（王子製紙社長）、東条内閣の五島慶太運輸通信相（東京急行電鉄社長）、藤原国務相、小磯内閣の藤原軍需相など財界出身者が入閣している。戦後も幣原内閣の渋沢敬三藏相（元日銀總裁）・小林一三戦災復興院總裁（阪急電鉄社長）、第一次吉田内閣の河合良成厚相（元東京証券取引所理事）・膳桂之助経済安定本部総務長官（日本團体生命保険社長）、片山内閣の永野重雄経済安定本部副長官（元日鐵富士鋼所長）、第四次吉田内閣の向井忠晴蔵相（三井合名常務理事）、鳩山内閣の一万田尚登蔵相（日銀総裁）

・高崎達之助（元電源開発総裁）・正力松太郎（北海道開発庁・科学技術庁長官）（読売新聞社長）・岸内閣の萬田藏相・藤山愛一郎外相（大日本製糖社長）・永野謹運輸相（元山叶商店専務）・正力國家公安委員長兼科技厅長官・高崎通産相兼企厅長官兼科技厅長官と財界出身者の入閣は続き、占領期経済經營及びその後の賠償外交に深く関わった。そして一九六〇年を境に、財界人としての入閣はほぼ途絶え、財界と政治との関係は、財界四天王と呼ばれる財界世話業による間接的関係や経団連などの経済団体による圧力団体政治に変わるのである。戦後における財界世話業としては、井上一・万田（日銀総裁）、郷一・小林中（アラビヤ石油社長、番町会）・永野護（番町会）、渋沢一・永野重雄（日本商工会議所会頭・経済同友会代表幹事）、結城一・中山素平（日本興業銀行会長、経済同友会代表幹事）と、戦前の系譜を引く人々があつたが、経済界と政治との関係の構造的变化に伴い彼らの影響力は次第に衰えた。戦後の経済復興・賠償外交における財界人の役割や、「六〇年体制」を境とし現在に至る政治と財界との関係変化の解説は、本書で残された課題である。

### 比較によるモデルの精緻化

以上のような財界の組織化分析を行った際、モデルとなつた政治経済史研究があつた。比較研究を行う一つのメリットは、雑多な情報を探論的に整理し、想定していかなかつたマルクマールや視座を獲得できる点にある。通常、筆者はアングロサクソンモデルの政治学を歴史的・社会的文脈を無視して安易に導入することに強い抵抗を感じるが、財界の形成と組織化とを分析する際に念頭に置いたのは、実はロバート・ウイービーのアメリカに関する研究であつた。

かつて三谷太一郎が、元幕府的存在を否定するために権力分散的で反政党政治的な特質を備えた明治憲法体制下で、何故に政党政治が成立し得たのかを理論的に説明する際に引照規準としたのが、リチャード・ホフシュタッターによるアメリカの政党研究であつたことはよく知られている。建国者達によつて「多数の專制」を抑制するために権力分立的で反政党的とされた連邦憲法は、正にそれ故に、合衆国レベルにおける大統領選出のための統合など、現実に非制度的な集権化要因を必要とし、政党を逆説的に必要とするとした。現在においては世界標準と見なされることが多いアメリカであるが、歴史的にそれは元来、腐敗したヨーロッパの旧文明に対する「聖地」としての辺境の理念国家であり、「移動」を国家形成の核心とする新たな「植民国家」であった。このことが与える影響は、政党のみでなく財界を含む経済権力においても当てはまるようと思われる。

財界人の革新主義運動を分析したウイービーは、まず冒頭で、アメリカを襲つた三つの戦争による技術革新の波について触れる。南北戦争後広まつた鉄道及び電信・電話のネットワークは、コミュニケーションの革新をもたらし、鉱工業における製造・流通の発達は全国市場を成立させ、町から都市、大都市への統合をもたらした。第一次世界大戦後のラジオや映画の普及、大

ために、政治の如何は自分達の知つたところではない、自分等は勝手に儲けて、自分だけ楽しんでゐさへすれば宜いのだといふ、政治に冷淡な、利己的で、非協同的な、謂はゆる町人根性」と厳しく批判した財界人の政治への無関心が、第一次世界大戦後にその政治的組織化と共に変化して、浜口内閣、そして斎藤内閣に至つて積極的に財界が国家中枢に乗り出すことになつたことは、アメリカと類似していた。日本でも第一次世界大戦後に開花した「革新」の動きは、世界に広がりつつあつたフォーディズムを始めとするアメリカ文化文明化の吸收を意味すると同時に、軍部・「革新官僚」ではなく財界が、第一次世界大戦後の経済変動に対応すべく政治組織化を進め国家との接近を進めた結果でもあつた。一方で、あくまで業界単位・地域単位の利益団体としての組織化が基軸になるアメリカと、財界世話業を中心には財界が一つに統合され国家との「抱合」を強めていく日本との、組織化的形態の違いも興味深かつた。アメリカの革新主義運動との比較がなければ、こうしたことの発見もなかつたように思われる。

### おわりに——政治史から現実政治へ

日本の財界は、西洋の近代制度を「移植」するため「財界世話業」という日本における前近代的装置を活用する中で成立した。それに気づくと、阿部謹也のテーゼ、即ち明治以降の日本社会は、文字と数字によって語られる近代化システムと、歴史的・伝統的システムという本音のシステムのダブルスタンダ

ードによつて成り立つており、近代化のシステムは、歴史的・伝統的システムによつて助けられ、これがないことは成立しなかつた、という」との意味が理解される。阿部は、歴史的・伝統的システムを「世間」と表現してきたがなかなか理解されず言ひ換えることとしたと述べているが、正にこの歴史的・伝統的システムこそ、非公式な財界による日本の経済システム設立・維持の事情を説明するものである。

狭義の制度的分析や眼に見える現象のみを表面的に捉えて單純な比較分析や数理モデルに投入するのではなく、歴史的・社会的文脈を明らかにし、非公式の制度が形成され現在に至つているかを理解することで、モデル設定の初期条件は豊饒なものとなり、現実理解も変わつてくる。数理モデルや計量分析を利する際最も重要なのは、如何に意味ある変数・因子を選ぶか、分析結果をどう解釈するかであり、それは、人間社会や現実政治に対する深い理解と関心に基づいた意味解釈や文脈理解によつてのみ支えられる。それらを養い、有意な解釈を提供することこそ、現代政治分析に政治史が貢献する役割の一つであると言えよう。

- (1) 鹿島茂『勝つための論文の書き方』(文藝春秋、二〇〇一年)。
- (2) 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠一郎『文明としてのイエ社会』(中央公論社、一九七九年) や京極純一『日本の政治』(東京大学出版会、一九八三年) 等は、象徴論を含む文化人類学・民俗学・社会学・歴史学との交流に基づく意味解釈的な政治学の豊かな果
- (3) 政治学者による例外的な書評としては、都築勉(『信州大学経済学論集』四八号、二〇〇一年)、松沢弘陽(『福沢諭吉年鑑』二九号、二〇〇一年)、坂野潤治(『史学雑誌』一一一編一〇号、二〇〇三年) 各氏によるものがある。
- (4) 松浦「帝人事件」考——戦前日本における財界の組織化と政界・財界関係(『日本政治学会編 年報政治学』一九九五年度「現代日本政官関係の形成」、岩波書店、一九九五年)。
- (5) 松浦「財界の政治経済史」七二頁。
- (6) 小風秀雄他編『実業の系譜 和田豊治日記』(日本経済評論社、一九九三年)。
- (7) 「池田成彬日記」(山県県立図書館所蔵)。
- (8) 「田健治郎日記」(国立国会図書館憲政資料室所蔵)。
- (9) まだみのる『にっぽん部落』(岩波書店、一九六七年)。福沢諭吉は「学問のすゝめ」(岩波書店、一九四一年)一四四一四八頁で「世話の字に二の意味あり、一は保護の義なり、一は命令の義なり。保護とは人の事に付き傍より番をして防護り、或は之に財物を与へ或は之がために時を費し、其人をして利益をも面目を失はしめざる様に世話をすることなり。命令とは人のために考え、其人の身に便利ならんと思ふことを差圖して不便利ならんと思ふことには異見を加へ、心の丈けを尽して忠告することにて、是亦世話の様なり。右の如く世話の字に保護と差圖と両様の義を備へて人の世話をすることは、真によき世話にて世の中は円く治る可し。』と述べている(北岡伸一氏の御教示による)。
- (10) ネットワークにおけるハブについては アルバート・ラズロ

## 第十回三宅賞について

三宅賞の目的は、現代日本政治研究の分野において、過去一年間に出版された論文の中から優れた作品に与えられるものです(賞金20万円)。今回の審査は2005年10月1日から2006年9月30日までに出版された論文を審査いたしました。選考委員会の慎重な審査の結果、第十回三宅賞については委員の合意が得られませんでしたので、該当なしと決定いたしました。

(文責:蒲島郁夫)

選考委員

猪口 孝 大嶽秀夫  
蒲島郁夫 村松岐夫

害である。こうした流れを「実証的な根拠の希薄な印象主義的研究」と切り捨てるのではなく、そこから学ぶことで得られるものは、政治史にとっても現代政治分析にとっても多いと考える。

(3) 政治学者による例外的な書評としては、都築勉(『信州大学経済学論集』四八号、二〇〇一年)、松沢弘陽(『福沢諭吉年鑑』二九号、二〇〇一年)、坂野潤治(『史学雑誌』一一一編一〇号、二〇〇三年) 各氏によるものがある。

(4) 松浦「帝人事件」考——戦前日本における財界の組織化と政界・財界関係(『日本政治学会編 年報政治学』一九九五年度「現代日本政官関係の形成」、岩波書店、一九九五年)。

(5) 松浦「財界の政治経済史」七二頁。

(6) 小風秀雄他編『実業の系譜 和田豊治日記』(日本経済評論社、一九九三年)。

(7) 「池田成彬日記」(山県県立図書館所蔵)。

(8) 「田健治郎日記」(国立国会図書館憲政資料室所蔵)。

(9) まだみのる『にっぽん部落』(岩波書店、一九六七年)。福沢諭吉は「学問のすゝめ」(岩波書店、一九四一年)一四四一四八頁で「世話の字に二の意味あり、一は保護の義なり、一は命令の義なり。保護とは人の事に付き傍より番をして防護り、或は之に財物を与へ或は之がために時を費し、其人をして利益をも面目を失はしめざる様に世話をすることなり。命令とは人のために考え、其人の身に便利ならんと思ふことを差圖して不便利ならんと思ふことには異見を加へ、心の丈けを尽して忠告することにて、是亦世話の様なり。右の如く世話の字に保護と差圖と両様の義を備へて人の世話をすることは、真によき世話にて世の中は円く治る可し。』と述べている(北岡伸一氏の御教示による)。

(10) ネットワークにおけるハブについては アルバート・ラズロ

# 日本政治研究 第4巻第1号目次

## 日本政治研究学会編

年二回1月・7月刊

〔世話人〕

五百旗頭真・猪口孝・蒲島郁夫・北岡伸一・御厨貴  
小林良彰・品田裕・苅部直・谷口将紀（編集主幹）

〈論文〉

イラク戦争に至る日米関係 2 レベルゲームの視座 千々和泰明

帝人事件と斎藤内閣の崩壊 菅谷幸浩  
昭和戦前期「中間内閣」期研究の一観角として

陸軍省軍務局と政治 陸軍官僚制の政治介入 大前信也

投票参加と社会関係資 岡田陽介  
日本における社会関係資本の二面性

〈特集 内閣機能は強化されたか？〉

改革の司令塔の実態 大田弘子・竹中治堅  
小泉政権における経済財政諮問会議

橋本行革の理念と実際、そして展望 匿名座談会  
行政改革着手十年、実施五年

〈書評〉

菊判230頁 定価：本体3000円+税  
07年1月15日刊行 ISBN978-4-8332-2383-6 C1031 ¥3000E

112-0002 東京都文京区小石川5-11-15-302  
木鐸社 電話(03)3814-4195 ファックス(03)3814-4196  
URL <http://www.bokutakusha.com/>

四一号予定

特集 現代日本社会と政治参加

辻中豊

三つのレベルの市民社会組織と政治参加――〇〇六一〇七 自治会、社会団体、NPO全国調査に基づいて

鹿毛利枝子

日本における戦前・戦後の市民社会組織の政治参加（仮題）

濱本真輔

選挙制度改革と自民党議員の政策選好

書評／他

定期購読のお願い

「レヴァイアサン」は全国の主要書店に配本されますが、定期購読をご希望の方は、号数明記の上、最寄書店か、小社宛に直接前金払いでお申し込み下さい。バックナンバーもどうぞ御注文下さい。

2007年10月刊行予定

(投稿も随時掲載)

レヴァイアサン 四〇号

1100七年四月十五日発行

編集委員

川人貞史  
辻中 豊  
眞渕 勝

加藤淳子

坂口節子

辻中 豊

木鐸社

発行人

坂口節子

発行所

木鐸社

東京都文京区小石川五十一十五十三〇二

電話 (03) 3814-4195

振替 00100-5116746番

Fax (03) 3814-4196

郵便番号 112-0002

印 刷 アテネ社

製 本 大石製本

<http://www.bokutakusha.com>